

柳宗元詩における詩體の問題

— 元和一〇年を境とする古體から近體への變化について —

下 定 雅 弘

柳宗元は、元和一〇年正月、一〇年ぶりに永州から都に召還されるが、直ちに柳州刺史として追放された。この境遇の變化に伴う詩の内容の變化については、拙稿「柳宗元柳州詩——葛藤の鎮靜とその由来——」(一九八一年、日本中國學會報三三。以下前稿と呼ぶ)で申見を述べた。この變化に呼應するかのように、宗元の詩は詩體もまた變化している。永州時代の詩の大多數は古體なのだが、都へ歸る北還時以後、元和一四年柳州で死ぬまでの詩のほとんどは近體なのである。

そして、宗元の詩の詩體が、元和一〇年を境に變つたのは、第二章に述べるように當時の詩壇の趨勢と符合している。だから、彼が詩體を變えた要因は、單に彼一人のものではないはずである。

宗元の詩の詩體の變化は、彼の境遇及び心境の變化とどう關係しているのか。また、時代とはどう關つているのか。それを考えるのが本稿の課題である。

先ず、議論の基礎となる資料を示しておく。宗元の詩は一六三首が傳わる。四五卷本の卷一雅詩歌曲に一六首、卷四二・四三古今詩に一四六首が傳わり、他に三三卷本殘卷の外集から一首を得て、計一六三

首である^①。本稿では古今詩及びもし編すれば古今詩に入る三三卷本外集の一首、計一四七首を主な對象として論じ、雅詩歌曲については必要に応じて觸れる。

この一四七首の詩體を明らかにし、それを編年してみると、詩體と作詩時期との間に、前述の特徴が見られる。参考資料(本稿末尾附載)の表1・2を御覽いただきたい。

表2に基づき、各時期の全詩作數に對する古體と近體との比を百分率で表わしてみる。

永州時代は八割が古體であり、北還以後は九割弱が近體となる。詩體の點から見れば、宗元の詩作は、永州時代と北還以後とに分けて考

	古	近
永	79.5	20.5
北	8.3	91.7
南	22.2	77.8
柳	11.8	88.2

※長安時代は省く

※少數點以下第2位は四捨五入した

えるべきことになる^②。

古體から近體へ變つたことと共に、北還以後の近體詩には、直ちに氣付く外面的特徴が有る。第一に、七絶が最も多く近體の半數を占め、七律・五律がこれに次ぐ。第二に、贈答詩が多數を占める。近體詩四八首中の三二首、六六・七%が贈答詩なのである。翻っ

て永州の作を見ると、贈答詩は古近合わせて一〇首に過ぎない。以上二點、表3により確認された。

二

この古體から近體へ、それも七絶を多數とする贈答詩へという變化は、中唐詩壇の趨勢と符合する。

宗元が詩體を變えたこの頃は、他の著名な詩人も古體から近體へ移行しているのである。

白居易は、武元衡暗殺事件での早すぎる上書を咎められて、元和一〇年の秋、江州司馬に左遷された。彼の詩は、この年を境として、律絶の制作量が激増し、古體の制作量は波を描きつつも次第に減っていく。元稹は、元和九年以後、恆常的に律絶の制作量が古體を上回り、元和一四年以後は律絶に専念している。韓愈も元和一〇年以後律絶の制作が古體を上回るようになっていく。

それぞれの理由を持ちつつ、元和一〇年前後は、詩壇全體が古體から近體への變化の時期なのである。

また宗元の北還以後の近體が、多數の七絶と贈答詩で占められていることも、當時の風潮と一致する。

先ず、七言の絶句・律詩が増加するのは、中唐期の大勢である。このことは施子愉氏の作成した次の表によって一目瞭然である。

五律は盛唐の二倍近く、絶對數では最も多く、五絶も盛唐の三・六倍を超えて活況を呈している。しかし、七言の律絶は盛唐の六倍強であって、特に七絶は、絶對數でも五律に迫る勢いを示している。七絶の盛行こそは中唐期の特徵であり、北還以後の詩が七絶を多數とする近體となったのは、この大勢に合致している。元和一〇年前後を境と

體裁 數目	時期	初唐	盛唐	中唐	晚唐
五言古詩		六六三	一、七九五	二、四四七	五六一
七言古詩		五八	五二一	一、〇〇六	一九三
五言律詩		八三三	一、六五一	三、二二三	三、八六四
七言律詩		七二	三〇〇	一、八四八	三、六八三
五言排律		一八八	三二九	八〇七	六一〇
七言排律			八	三六	二六
五言絶句		一七二	二七九	一、〇二五	六七四
七言絶句		七七	四七二	二、九三〇	三、五九一

※「唐代科舉制度與五言詩的關係」(1944年, 東方雜誌40-8) 收載

※「全唐詩」中少くとも一卷を有する詩人の詩について数えたもの

して、白・元・韓・柳、皆この大勢に歸したのである。

また、近體による贈答唱和が盛んとなるのもこの頃である。その主導者は無論白居易と元稹である。二人の贈答は、貞元の末年から始まるが、「元和の四年から、にわかには繁くなる」¹⁰⁾のであり、宗元が詩體を變える元和一〇年に先行している。白居易と劉禹錫との贈答唱和も元和一〇年に始まっている。北還以後の宗元の詩は、こうした近體による贈答唱和の盛行を反映している。その證據の一つは、花房氏が既に舉げられている。「奉和楊尙書郴州追和故李中書夏日登北樓十韻之作依本詩韻次用14」¹¹⁾がそれで、この頃和韻の様式は一世を風靡しており、宗元もこの影響を受けているのである。また禹錫との間に交わされた七絶の連作五首(55~59)も、白・劉の贈答唱和の進行と軌を一にするものである。

彼の詩の詩體の變化は、以上のように當時の趨勢に合致している。

だから、その變化の背後には時代の變化が存在するはずである。以下、詩體を變えた宗元の必然を探る。その作業は自ずと、宗元らの詩體を變えた時代の姿を引き寄せるだろう。

三

詩體を決定するのは、何よりも各々の詩の内容である。だから、各時期の詩について、その内容が古體もしくは近體を必然とした理由を確かめ、その上で背景に在る諸問題に言及する。永州時代の古體から考えよう。

三の一

永州の詩の六七・五％は五古であり、古體の約八五％を占める。この五古には、山水詩、花木詩、佛教詩等に分類できる幾つかの詩の群が有る。これらが五古で作られた理由を詩數の多い分野から順に考え、次いで複數のまとまりを持たない詩についても言及する。

三の一の一

山水詩とするのは一五首である(表1・3参照)。

宗元の山水詩が五古で作られる決定的な理由は、それが釋老を志向し古人を慕って作られているからである。

佛教詩の項で述べるように、宗元は釋門・道門に關係する詩は五古の古調に依ることを原則としていた。山水詩にも同じ姿勢で向かっていると考える。

古人とは、山水詩の場合、主として謝靈運である。また、五古の山水詩の近い先達には韋應物がある。特に短古の落ち着いた世界が、應物の清閑の世界に近い。

また、山水詩が紋景を伴うことは、五古の古體としての性質にふさ

わしい。紋景は一箇所ではなく行程に即して行われることが多いから、山水詩は長篇化する傾向が有る。この紋景による敘事性の高さと長篇化の傾向も、聲律・對偶・句數等に縛られない五古の自由度の高さに適している。

五古がふさわしい理由はそれだけではない。宗元は、釋老を志向し古人を慕い、賞による安寧を求めたが、容易にそれに徹することができなかった。

例えば『法華寺石門精室三十韻70』の四四句までは、法華寺の有る東峰へ登っていく道の紋景と釋門への思慕の表現なのだが、四五・四六句では「淹留して頽暮に値う、眷戀して遐壤を睇すみみる」と、老いの悲哀と望郷の念に襲われ、また「羈木漂浮を畏れ、離旌搖蕩に倦む」(五一・五二句)と流涕の悲哀を述べる。最後には「微言信に傳う可し、申且吾が頽を稽す」と釋門への傾倒を表明するのだが、ここへ至る道は平坦ではない。また『遊南亭夜還紋志七十韻80』は、山居に安らぎを見出そうとしながらも、遂に亂れた思いで終わっている。

釋老を慕ってみても官人としての本性が頭をもたげるのであり、失脚のいきさつを思っては心の收拾がつかないのである。賞による安寧にしても、宗元自身がその一時性を知悉していることは前稿で述べた。彼の葛藤の複雑さとそれに基づく長篇化の傾向も、五古の自由度の高さに適しているのである。

長篇に比べれば、短古は落ち着いている。しかし、それも揺れ動く長篇の一面面である。例えば「機心當路に付す、聊か羲皇の情に適う」(『且搴謝山人至愚池83』七・八句)の「聊」、たまたま「予が心適無事、偶たまたま此に賓主と成る」(『雨後曉行獨至愚溪北池92』五・六句)の「適」・「偶」等に、安寧に對する宗元の評價が見える。短古の落ち着いた世界の不

安定性を、短古自身が語っているのである。

三〇一二

花木詩は一二首である(表1・3参照)。

花木の詩も、長篇と短古で性質が異なり、長篇は種樹の詩が多く、

短古は花木の美しさや芳しさを歌っている。

今、『種朮104』を例にとつて、五古が種樹詩にふさわしい理由を考えてみよう。

「朮」は利尿・發汗・健胃等に效くという藥草である。詩は八句まで東山からこれを移植するいきさつを述べ、一八句まで庭に植えた朮の佳色・藥效等を述べる。この敘事性の高さによって種樹詩は長篇となるのである。そして、敘事やこれに基づく長篇化が古體の自由度の高さを求めるのは、山水詩の場合と同じである。

またこれが五言の古詩でなければならぬのも、やはり山水詩と同じく、老莊を志向し古人を敬慕するために五古の古調を求めるからである。『種朮』は先の敘事表現の後、「留連す蕙を樹うるの辭、婉婉たり薇を採るの歌。拙を悟りて自ら足るに甘んじ、清を激して波を同じくすることに愧す。單豹且つ内を理む、高門復た如何。」と歌いおさめる。「蕙を樹う」は、離騷の「余既に蘭の九畹を滋す、又蕙の百畹を樹う」に基づく。次の句と共に、逆境に在つても節義を貫くことを言う。「拙を悟りて……」の二句は、失脚の經緯を思つて亂れる心を抑える句。「單豹……」の二句は、莊子達生に「豹は其の内を養いて虎其の外を食ひ、毅(高門)は其の外を養いて病其の内を攻む。」とあるのに基づき、心身の兩面を養わねばならないことを言う。他の長篇の種樹詩も、『自衡陽移桂十餘本植零陵所住精舍110』を除けば、皆養生のための種樹のいきさつと感興を歌い、うち『種仙靈毗103』『種白藜

荷105』『種靈壽木109』の三首は、いずれも老莊に傾倒する句を持っている。

老莊と結びついた種樹詩の祖はやはり靈運である。その『田南樹園激流植援』では、「寡欲」(老子第十九章)・「妙善」(莊子寓言)により「痾を養ひ」心の安らぎを得ようとしている。宗元は種樹詩についても靈運を意識したと見てよい。

短古の花木詩は、花木の美しさや芳しさを歌うのだが、それは宗元自身身の境遇と重ねあわせて歌われることが多い。

例えば『湘岸移木芙蓉植龍興精舍111』一・二句に「美を有ちて自らを蔽わず、安んぞ能く孤根を守らん」と言うのは、木芙蓉に永州に流された宗元自身の姿を見ている。花木の美しさを歌つて自らの貞潔・美質に喩えるのは、楚辭を淵源とする傳統である。語句を見ても、「芰荷諒に糴り難し」(第七句)と言うのは、招魂に「芙蓉始めて發くや、芰荷雜わる」とあるのを踏まえ、木芙蓉(芙蓉)は芙蓉(蓮花)とは異なるのでこう言つたのである。同様のことは『南中榮橘柚113』及び長篇の『自衡陽移桂……110』についても言える。また『新植海石榴106』『紅蕉114』は、花木自體は楚辭に登場しないが、その美しさに自己の美質と孤高を重ねあわせる點や語句の使用に楚辭の香りを認めることができる。

『戲題塔前芍藥107』『早梅112』も、花木自體は楚辭に見えないが、花を贈ろうとして届かない悲しみを歌い、自己の忠心の通じないことに喩えるのは、楚辭に始まり、古詩でも歌われた傳統である。

要するに、これらの作は、楚辭の孤高獨善の精神を核として成立しているから、五古の古調を求めるのである。それが短古であるのは、花木自體の美しさを描寫することよりも、自己の不遇と高潔を花木に

託して歌うのが目的だからである。

この分野についても、先達としての應物の存在は大きい。種樹詩は『種葉』、『西澗種柳』、『種瓜』の三首（七九、第二次印刷中華書局『全唐詩』卷一九三。以下宗元以外の唐人の詩については、同書收載の巻数を記す）が有り、いずれも幽閑の趣きを持つ五古である。花木の美しさを歌った詩についても、唐人（全唐詩の白居易まで）の作には古近兩様が見られるものの、五律及び七絶が多い。しかし、應物の作はほとんど五古で占められている。

三の二三

佛教詩とするのは八首である（表1・3参照）。寺院を詠んだ作及び釋門への贈答詩をこの類に入れた。

『晨詣超師院讀禪經7』は、早朝超師院に詣でて讀經したおりの心境の清淨と寺院の閑雅とを歌う。『唐詩類苑』はこれを經部經典に入れるが、經の内容を歌うことが表現の中心ではない。『巽公院五詠15』と共に、廣く寺院の雰圍氣を詠んだ作の系譜の中で考えればよい。

『巽公院五詠』は、『淨土堂』、『曲講堂』、『禪堂』、『芙蓉亭』、『苦竹橋』と、巽公院（重巽の居住する龍興寺）の各所を、いずれも一〇句で詠んでいる。五首は、寺院の中心から周邊へと歌い進んでいるのである。初め三首が、佛理を説く語がやや多いのは、堂を歌うからであり、後の二首は景とその雰圍氣を述べていて閑適を求める山水詩の歌い方と異ならない。唐代ではこの類の詩は枚擧に遑が無い。ただし、これを連作にするのは珍しい。

『贈江華長老8』は、長老の悟りの深さと清貧を歌う。『巽上人以竹間自採新茶見贈酬之以詩9』は、贈られた新茶の香りを佛の教化になぞ

らえて謝辭としている。今、時期にこだわらず、また道門への作も含めて贈答詩を見ると、他に『酬賈鵬山人郡内新栽松寓興見贈二首47・48』、『浩初上人見貽絕句欲登仙人山因以酬之51』、『雨中贈仙人山賈山人52』の四首が有る。うち近體は『浩初上人』のみで、それも浩初上人が七絶で贈ってきたのに應じた結果である。

寺院を詠む作にしても、釋門・道門との贈答の作にしても、唐人は古近兩様の詩體で歌ってきた。宗元が釋門に關係する詩を五古で作った最大の理由は、彼自身がこの類の詩には五古の高古・古直を求めたと見るしかない。ただし、韋應物は、多數の寺院を詠んだ詩と、二〇首近い釋門・道門との贈答の詩を残しているが、前者のほとんど全てを五古で、後者の大半を五古・五絶で作った。山水詩・花木詩と同様應物の作風を慕うきもちが宗元に有った可能性は大きい。

三の三四

『首春逢耕者85』及び『田家三首122・124』の四首を、田園詩としてまとめる。田園詩の祖は無論淵明である。これらの詩が五古で作られているのは、その敘事性が古體にふさわしいということもあるが、何よりも淵明の詩の閑適の風を慕って作られているからである。

ただし、『田家三首』について、中國の研究は、その現實描寫の面のみを強調する傾向が有るので、この點について觸れておく。

『田家』と題する詩は、王績（一作王勃）『田（一作山）家三首』（三七）に始まる。以後、王維『丁寓田家有贈（英華作田家贈丁禹）』、『渭川（一作水）田家』（二二五）、孟浩然『田家元日』（二六〇）、韋應物『觀田家』（二九二）等、二〇人に近い詩人が『田家』の詩を残した。その大多數が五古であるのは、この系譜が淵明の風を慕って作られているからである。

作風の大勢は、農民の暮しを自然に順應した閑適の暮しと見、自分も俗塵を離れてそこに溶けこもうとするきもちを歌うものである。農民との距離は詩人によって異なるが、その生活に機事を超脱した一つの理想の姿を見ている點では皆共通する。

だから、『田家』はあくまで閑適の系譜であり、宗元の作もこの系譜から外れてしまうものではないと考える。ただ彼の詩は従來の作に比べれば、農民の描出がその現實に最も近い。特に其二は、これだけを取り出せば、諷諫の詩と言っても差し支えない程である。この點では宗元は農民を理想化してはいない。にもかかわらず彼が羨むのは、その十年一日の苦しい生活に對する彼らの心の持ち方である。「子孫日に已に長ず、世世還た復た然り」(其一)と言うように、徒勞に満ちた生活を彼らは澹澹と續けてゆく。このような心境で生きてゆけることへの憧憬が、宗元に『田家三首』を作らせたのだと考える。

三の一の五

『詠史141』、『詠三良142』、『詠荆軻143』の三首は詠史の作である。この系譜が班固以來の傳統であるのは言うまでもなく、これらの作が古調を求めて五古で作られるのは當然である。内容の特徴に觸れておく。

『詠史』は、昭王の下で功績を擧げた樂毅が、恵王即位後は、身を顧みなかったため、陥れられて趙に逃れる結果になったことを歎く。陳子昂も、樂毅が昭王との信頼關係を追慕したことを歌う。しかし、恵王との不和に言及するわけではない。樂毅は勿論宗元を、恵王は憲宗を寓しているだろう。

『詠三良』は、宗元以前、曹植、王粲、阮瑀、淵明が詠んだ。四者を比べれば小異は有るが、三良の志を哀れむ點は共通する。宗元もその死を傷むのは同じだが、穆公を繼いだ康公を批判する點で従來と異

なる。三良は八司馬を、康公は憲宗を意識して歌っている可能性が有る。

『詠荆軻』は、太子丹及び荆軻の勇に走った愚かさを批判する。従來は、阮瑀、左思、淵明等が詠んだ。これも小異は有っても、皆荆軻の壯志を歌う。これを批判した宗元の作は従來の歌い方を一變したものである。この詩も、失脚を招いた輕舉への自戒の念を含むかも知れない。

三首は、おそらく皆失脚のいきさつを寓している。そして、批判と自況・自戒とが混然となつてゐる點が注目される。

『感遇二首139・140』の先蹤は、無論陳子昂・張九齡のそれである。二首はいずれも難解だが、其一は、朝廷が危機に頻しているのに忠臣のいないことを歎き、其二は、おそらく宗元自身の境遇の激變を寓している。

三の一の六

複數のまとまりを持たない詩のうち、先蹤を確認できることにより、五古で作つた理由の明らかな詩を指摘しておく。

『郊居歲暮90』は、貶謫の寂しさを歲の暮にひときわ感じ、無氣力となつてしまつた心境を歌う。この詩は、靈運の『歲暮』(關文)及びこれを繼いだ鮑照の『歲暮悲』を意識する。

『飲酒37』は、淵明の『飲酒二十首』を意識する。

『讀書138』は、靈運の『齋中讀書』を意識する。また「書史自ら悦ぶに足れり、安んぞ動と動とを用いんや」(二五・二六句)と言うのは、淵明『五柳先生傳』の「甚だしくは解することを求めず」の姿勢と同じであらう。

三の二の一

永州の七古と確認できるのは一〇首である（参考資料参照）。複数のまとまりを持つ作に重點を置いて述べる。

『行路難三首125-127』は、樂府詩集卷七一雜曲歌辭に收められている。形式は七言で一貫するか、あるいは七言に三言（君不見）や五言を雜えるのがこの樂府題の傳統であり、宗元の作も、其一・其二に「君不見」を雜えるのは、この傳統に沿うものである。

其一は、日を逐おうとした夸父は力盡きて渴死し、身の丈九寸の小人はつつましく生きて壽命を全うしたことを歌う、其二は、山の樹木が伐採されてしまつて、火災のため材木が必要な時には材の無いことを歌う。其三は、寒い時には重寶される炭も、時が過ぎて暖かい時節になれば放り棄てられてしまふ、同じ運命は暖かい時節に用いられる桃枝の篋や葵の扇をも見舞う、と歌う。

三首の寓意は、韓醇が「蓋し自らを謂うなり」（其一）、「蓋し同輩諸公一時に貶黜せらるるの意を言うなり」（其二）、「蓋し其の前日は朝に居りて行い今日貶せらるるの意を言うなり」（其三）と指摘する通りであらう。

特に意識したと思われる先行作品は無いが、自らの不遇や政治批判を假構の世界に託すのは、鮑照以來の傳統に沿うものである。

三〇二〇二

『歧鳥詞129』、『籠鷹詞130』、『放鷓鴣詞131』の三首も、樂府系の作である（樂府題を踏襲するわけではないから歌行とみなしてもよい）。

『歧鳥詞』は群を離れた歧鳥を歌い、『籠鷹詞』は熱風に襲われて翼の抜け落ちた鷹が籠に捕えられることを歌い、『放鷓鴣詞』は網にかかったのろまな鷓鴣を放してやることを歌う。

三首は、「皆以て自らに況う」（韓醇）自「憐憫と自戒の詩である。

鳥を素材とする樂府には、『烏夜啼』（樂府詩集卷四七）、『烏生曲』（同四八）及び同系統の諸作が有り。これらの作で群を失つた孤獨な鳥の映像は完成している。歧鳥としたのが宗元の創意である。

『烏夜啼』はもと五言だったが、簡文帝が七言八句で作つて以後は五・七のいずれでも作られるようになった。『烏夜啼』の傍系である『烏生曲』はほとんど七言である。

鷹を素材とする樂府詩は無い。意識したかも知れないのは、隋文帝の『詠鷹』五言二句である。これは捕えられた鷹がもはや凌雲の志の無いことを歌う。

鷓鴣を歌つた作は、樂府詩集卷八〇近代曲辭二に、無名氏の『山鷓鴣二首』が收められている。唐人では、宗元以前に、李嶠（一作韋應物、五七）蘇頌（七四）李白（一六七）が鷓鴣を歌っている。通常五言で、七言は李白の作だけである。

『歧鳥詞』は、『烏夜啼』・『烏生曲』の流れを受けて七古にした。他の二首についても、樂府系の作だという意識と歌う内容の敘事性や起伏とが重なつて、曲折に富む七古の詩體を選んだのであらう。

三〇二〇三

『漁翁136』も、高通『漁父歌』（二二三）・元結『欸乃曲』（樂府詩集卷八二、全唐詩卷二八・二四一）・張志和『漁父歌』（樂府詩集卷八三、全唐詩卷三〇八）等の影響を受けて生まれている。

これらの作は、楚辭漁父以來の傳統を承けて超俗閑適の境地を歌う。詩體を見ても、高通の『漁父歌』は八句の七古、『欸乃曲』五首は七絶だが、其一を除けば古體もしくは拗體であり、張志和の『漁父歌』は七・七・三・三・七の雜言である。

七古の詩體で、漁父に託して超俗閑適の境を歌う傳統は、宗元の前

にできており、彼の作もこの系譜に位置づけられるのである。

『聞黄鵠133』は、黄鵠の鳴き聲に觸發されて望郷の情を歌いあげる歌行である。この制作には、おそらく應物の『聽鶯曲』(一九五)がヒントになっている。應物の作は春の明け方の鶯の鳴き聲の消長と街の雰圍氣の變化とを歌う。この鶯の鳴き聲を展開の軸とする點とそれによさわしい波瀾抑揚に富む長篇七古の詩體の選擇という點を、宗元は應物から引き繼いだ。

『再溪99』、『戲題石門長老東軒10』の二首の内容は、前半から後半へ截然と變化している。この變化が換韻を特徴とする新式七古の詩體を選ばせたのであろう。紙幅の都合でその説明は省く。

以上により、五古と七古を振り返ってみると、内容の特徴として次の諸點が指摘できる。

先ず共通點としては、近體と比べた場合自由度が高いから、敘事や複雑な葛藤の表現に適している。

兩者の相違としては、二點が挙げられる。第一に、儒と釋老とを問わず、思想性の強い内容は五古の古調に擔われており、遅れて發達した七古にはほとんど見えない。ただ、『行路難』、『漁翁』のように樂府の傳統を繼ぐ作はその限りではない。第二に、七古は、敘事・抒情を問わず、起伏に富む表現には五古よりも長ずる。その特長は、『聞黄鵠』に見るように、長篇七古に良く發揮されている。逆に言えば、五古か七古かを選擇する基準はこの二點に在ると言つてよい。

以上、永州時代の五古と七古について、その詩體を選擇した理由を考えた。觸れ残した作も有るが、本稿の課題に必要な材料は示せたとする。

三〇三

鳥瞰すると、作品は幾つかの傾向に分けることができる。一、諷諭の詩。二、自況の詩。三、閑適の詩。四、その他。

一と二とは混然となつていて、詩の一つ一つをどちらかに類別するのは難しい。五古では、詠史の三首、『感遇二首』、七古では、『行路難三首』及び鳥を詠んだ三首が挙げられる。鳥を詠んだ三首は、特に自況の要素が強い。

三に該当するのは、山水詩、花木詩、佛教詩、田園詩、『郊居歲暮』、『飲酒』、『讀書』、及び七古の『漁翁』である。これらの詩は全て、貶謫の苦悶から逃れようとしての心の持ち方を問題として作られている。

四に入れたのは、何かに寓することなく思いを率直に歌つた七古、即ち『聞黄鵠』、『再溪』、『戲題石門長老東軒』である。

以下、これらの詩を生んだ背景を考えよう。

諷諭については、宗元自身「文に二道有り、辭令褒貶は著述に本づける者なり。導揚諷諭は比興に本づける者なり。」(卷二「楊評事文集後序」)と、文の效用のうち「導揚諷諭」を擔うのが、詩經の「比興」の傳統を繼ぐ詩の役目だと言う。この主張に基づけば、當然古體を重んずることになる。これを實踐したのが、導揚では卷一雅詩歌曲の諸作及び『章道安81』、諷諭では前述の諸作及び柳州での作『古東門行12』である。

詩に批判精神を求め古體を重んずるのは、陳子昂以後、李白、元結、杜甫へと發展していき、中唐に至つて元・白の新樂府運動へと結晶する大きな潮流である。宗元の主張と實踐もこの流れの中に在る。

ただし、永州の宗元の諷諭詩は、白居易の新樂府のような純然たる社會批判の詩ではない。それは全て彼自身の失脚をめぐる憤怒や悔恨

を歌つたものであり、諷諭と自況とが一體となつてゐる。この表現の姿勢には、詠史、感遇、行路難等がふさわしい。これらは皆、詩人自身の不遇をめぐつて諷諭と自況とを一體として歌う傳統を持つからである。

閑適の詩が古體で作られる理由は既に指摘した通りである。しかし、宗元自身はこれらの詩の性質については何も語っていない。

だが白居易がこれを明確に語っている。言うまでもなく「閑適」の語は、白居易『與元九書』での用語を借りてゐる。彼は自己の詩を、諷諭詩・閑適詩・感傷詩（以上古體）・雜律詩の四類に分け、諷諭詩を最も高く評價した。しかし、「古人云う、窮すれば則ち獨り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を濟う。」と孟子の言（盡心上・風俗通義十反）を根據とし、諷諭詩は兼濟の志の、閑適詩は獨善の義の表現であつて、いずれも「僕が道を知る」ものとして、閑適詩をも評價する理論を提示した。彼は閑適詩が諷諭詩と表裏一體のものであることを明言したのである。

宗元の山水詩・花木詩・佛教詩等も、居易のこの理論を骨格として意義づけられる。

永州の宗元は、貶謫を陥れられた結果と考へてゐた。だから、他者への對應の甘さを悔いしはしても、自己の信念や行爲を貶謫の原因として見据えることは無かつた。そして、この意識はそのまま都の官界の一員たるべき自負と願望に繋がつてゐた。諷諭詩に見えていたように身は謫地に在りながら心は都に生き續けたのであり、この葛藤が彼を苦しめた（前稿に述べた「第一の葛藤」にあたる）。この苦しみを逃れようとして、彼は都を俗塵の巻と見下しこれに背を向けて、山水に心を寄せ、花木を賞で、釋老に頼つた。即ち獨善の精神に生きようとした

のである（前稿に述べた「第二の葛藤」にあたる）。

宗元の閑適の詩は、この自負心の裏返しとしての獨善の精神の産物なのである。

そして、居易が、釋老を志向し淵明や應物を敬慕して古調で歌つたのと同様に、宗元もまた閑適の世界を古調で染めたのである。

以上を要するに、都の官界の一員たるべき自負心とその適えられない所に生まれる獨善の精神とが、永州の古體を生んでいたのである。そしてまた、自負と獨善の間を往復する葛藤の複雑さが、古體の自由度の高さを求めたのである。

ところで、諷諭詩と閑適詩の量を比べると、閑適詩が大多数で、諷諭詩は少い。しかも純然たる諷諭の作は皆無である。この現象は、宗元にとっての詩の役割を語つてゐる。永州で司馬という閑職に在つた宗元にとって、士としての志を發揮する場は詩文しかなかつたが、その志は、文と雅詩歌曲に發揮された。諷諭詩の目的とする政治批判の仕事も主として文で果たされたのである。だから諷諭詩が少いのである。詩（古今詩）が擔當したのは、貶謫が生む苦悶と悲哀を淨化するものであつた。だから、閑適の詩が多数を占め、自況と諷諭との一體となつた詩が作られたのである。

流謫に關わる心境を歌うという詩のこの役割は、北還以後も變らな

四の一

北還以後の詩の多数が贈答の律絶で占められるようになった宗元の必然とは何か。

まず律絶という形式を求めた内容について考えよう。紙幅の都合で個々の詩にはほとんど觸れることができない。前稿を参照願えれば幸

いである。

北還時の詩は、主として七絶により、一〇年ぶりの歸還への喜びと不安とを歌う。この時の詩は、永州での複雑な葛藤の根底に在ったものが何かをはっきり示している。

南還時の詩は、再び都に戻ることは無いであろう人生の岐路に立ち、主として五絶によって、過去と前途への無限の思いを歌う。

柳州の律絶も、僻遠の地に在る悲哀や望郷の情を歌った詩が多いが、柳州に溶けこもうとするきもちや柳州刺史としての安らいだ心境を歌った詩が數首有る。

だから、各時期の特徴は無論有る。北還時の喜びを南還後の悲哀と比べることはできない。南還後についても、大打撃を受けて間もない時期の詩と柳州着任後時を経たからの詩とは違いが有る。しかし、どの時期の律絶にも、永州の古體に見たような自負と獨善や葛藤の複雑さは無い。その心境は純一である。この純一な心境には短篇の律絶がふさわしい。

律絶は、古詩の長じていた様々な特質を持たない。敘事、複雑な葛藤、思想性、起伏、これらのいずれも律絶の特長ではない。律絶は、その新しさと、平仄・句法・句數の短かさ等の規則によって、純一な抒情を形成するのに適している。

無論、律絶も各々の特長を持つ。

七言はその新しさにより古調を伴わない。また、一句の字數の多さとリズムの輕快さにより、五言よりも意味は明瞭で調子は流暢である。従って七言の律絶は、思想性の稀薄な純一な抒情に長じている。うち七絶は餘韻を生む詩體であり、北還以後の複雑さを伴わない望郷の情の表現には最も適している。

一方、五律は、近體とは言え五言であることで、古調の味わいを残している。例えば、最晩年の作と思われる『種柳戲題49』は、おそらく『五柳先生傳』の閑靖を意識し、結びでは左傳及び召南に見える召公の故事を慕っているが、この古人への思慕は五律に託されたのである。それが律であって五古を選ばなかったのは、死んでいく自己と生長していく柳との對比を律詩の對偶に託して、柳州刺史としての澄んだ心境を表現しようとしたからである。

また、五絶の字數の少さとリズムの斷續性は、各詩體中意味の形成において想像作用の占める度合を最も高くしている。従って五絶は、無限の思いを胸中に湛えつつ、だからこそ相應する言語を持たない時、却って最適の表現形式となる。五絶は數少いが、これが南還時に四首も作られていることは、この時期の心境の特質を示している。

北還以後の心境が律絶にふさわしいことは以上によって明らかである。各詩體の特長は有るが、純一な抒情には律絶がふさわしいのである。

そして、律絶の示すこの心境が、北還以後を支配する心境である。初めに述べたように、北還以後の詩の九割近くは律絶であり、老莊と關係する内容を持つ古體は有るが、それはごく僅かである。また、文に詩と矛盾する心境は見えない。従って、律絶の示す純一な心境を北還以後を支配する心境と認めてよい。無論、心は詩よりも遙かに無定形で複雑だが、永州時代との比較という觀點に立てば、こう斷言して差し支えない。

以上によって、北還以後の心境の純一性が、詩のほとんどを律絶にしたのだと言える。

では、贈答詩が増加するのはなぜか。

贈答詩の絶対量の増加については、司馬から刺史への身分の變化が關係している。永州の宗元は定員外の司馬という罪人扱いで、贈答が憚られる状態だったから、相手を見ると、禹錫・岳父・貶謫の身の人・無位無官の人・釋門と、範圍は限られている。これに對し南遷後は、同輩の他州の刺史及び京中の親故との贈答が増えているのが大きな特徴である。それは僻遠の地とは言え、刺史として赴任した身分の變化に對應する。

だがそのことは、贈答詩の割合の増加を説明しない。問題は、獨白の詩がごく僅かとなり贈答の詩が多數となったのはなぜか、ということである。

贈答の詩を獨白の詩と比べた場合の特徴は、相手に思いを伝える詩であり、そのため、多かれ少かれ儀禮と節度を必要とする、ということであろう。

永州の詩に見る自負と獨善、不安定、憤り、悔恨等は、贈答に適した精神と感情ではない。閑適や自況には、獨白こそふさわしい表出方式であった。永州の宗元は、多量の獨白の詩によって流謫の悲哀の淨化を行っていたのである。

しかし、北遷以後の律絶に、そのような人に伝える上で障碍となる要素はほとんど無い。北遷時の喜びが贈答の障碍とならないのは勿論だが、南遷以後の悲哀の表出も、純一で、感情は鎮靜している（「鎮靜」は「純一」の結果である。五章を参照。激しい感情を「示す詩も有るが、それは八司馬と親故に寄せたものに限られている。

永州時代の心境には、儀禮と節度を要するという贈答詩の特性は障碍だった。しかし、北遷後の心境の純一性と感情の鎮靜はこれを問題

とせず、人に伝えるという淨化にとつての有用性をそのまま生かすうになつたのである。同時に、獨白の詩の必要度は著しく低下したのである。

以上を要するに、北遷以後の心境の純一性が、この時期の詩の多數を贈答の律絶としたのである。

確かにこの頃は贈答の律絶が流行していた。だが、上述の北遷を契機とする心境の變化が有つて、初めてそれを受け入れることになつたのである。

五

では、古詩を生んでいた自負と獨善から、贈答の律絶を生んでいた純一な心境への變化はどうして起つたのか。

北遷は復歸の願望が満たされようとする過程である。だから自負心は激しさを失い獨善の精神は消えている。この單純さにおいて、原因は異なるのだが、北遷時の心境は南遷以後のそれと共通する性質を持つのである。

再度の放逐という大打撃を受けて、永州時代の自負心は碎かれる。それは、どのようにして碎かれたのか。

この問題の手掛りとなる宗元自身の發言が有る。

柳州への途次、宗元は「直ちに慵疏を以て物議を招く、文字を將て時名を占むることを休めん」（『衡陽與夢得分路贈別32』）と言う。「物議を招」いた「文字」とは、主に永州での古文による批判的な文辭であろう。諷諭詩の批判的な言辭も問題となつたかも知れない。事實、柳州では批判的な古文は無くなら、失脚をめぐる諷諭詩も作られなくなる。だが、宗元がこういふ時、單に筆禍を招いた批判的な文・詩だけ

を意識しているのではなく、それを支えた永州時代の精神をも問題としておらずである。もう少し言えば、彼は、再度の放逐を招いた原因は自らに在ると考え、強い自負心を持って文・詩に生きた永州時代の生き方を清算する決意をしているのである。

やはり衡陽で、宗元は「書を信じて自ら誤れることを成す、事を経て漸く非を知る」(『三贈劉員外34』)とも言う。「書」とは「古書」である。「誤れること」とは、永州での古文・古詩による批判的な文章活動であろう。彼はここでも放逐の原因は自分自身が作ったと語っているのである。自己の信念と行爲とが放逐を招いた原因であることを「事を経て漸く」「知」ったと言うのである。

この兩者の流謫の原因を見る目には、永州時代と比べると、一八〇度の轉換が有る。

だから、現實に復讐が絶望的であると同時に、放逐の原因を自らが作ったとする認識が、都に在って當然との思いを打ち碎いたのである。

永州の一〇年を支えた自負心はこうして消えた(前稿に述べた「第一の葛藤の質的變化」にあたる)。

この時同時に、都を名利の巷と見下して、これに背を向ける獨善の精神も消失した(同じく「第二の葛藤の消失」にあたる)。以後、流謫の悲哀・望郷の情は抑制されることが無くなる。一言で言えば葛藤が純化したのである。上述の心境の純一性とは、この葛藤の純化に照應する。

この流謫の現實——都との斷絶——を已むを得ないものと受けとめる思いが、葛藤を鎮靜させ、遂には柳州刺史としての死を安らかに受け入れる心境を導いた。逆に刺史となって、官人としての志を發揮す

る場を得たことが、都との斷絶を受け入れやすくもした。さらに死期の近いことへの覺悟も加わり、これらが互に關聯しながら、寂しく澄んだ柳州獨特の心境に至るのである。

以上によって明らかかなように、自負心の消失こそは、柳宗元の心境の變化の要である。だがそれは、彼が唐朝の官人としての使命感を失ったことを意味しない。

柳州の宗元は刺史としての政務に没頭した。詩でも、その氣概は『柳州峒氓45』に、満足感(『種柳戲題49』)に見ることができ、また、元和一二年吳元濟が平定された折には、『平淮夷雅一篇』を獻しているが、これは「太平の功、中興の德」を頌えた導場の作であり、唐朝の官人としての永州時代以來の念願を果たしたものである。諷諭についてもただ一首とは言え、武元衡暗殺事件を扱った『古東門行12』を詠んでいる。

宗元は、都の官人としての人生への執着は棄てたが、唐朝の官人としての使命感は全うしたのである。

六

宗元は、元和の始まる前年、永貞元年に永州に左遷され、元和の終わる前年、元和一四年に柳州で死んだ。彼の詩のほとんど全てはこの間に作られたのである。

元和の中興と言われるように、この時期は中唐の最盛期である。それは危機の時代だが、官人たちが危機に對處する使命感を燃やした時代である。この使命感の高揚の詩文への現われが、元白の新樂府運動・韓柳の古文運動を中心とする復古の高潮に他ならない。

居易の新樂府は、この使命感と諫官としての自負心との結合の産物

であり、宗元の閑適詩もこの使命感と都の官人たるべき自負心との結合の逆の現われである。

この二人が共に元和一〇年を境として詩體を變えた。居易もまた江州左降を「始めて名を文章に得、終に罪を文章に得たり」(『與元九書』)と、筆禍と考へ、以後諷諭詩はほとんど作らず、律絶の制作量を激増させたのである。

だから、今他の詩人については明言できないが、少くとも居易と宗元にとっては、元和一〇年頃の都の官界の批判者壓殺の姿勢が、詩體を變える動因となっている。逆に言えば、彼らの詩體の變化は、元和という使命感の高揚の時代が終わりに近づいたことを告げているのである。

元和がどういう時代だったのかは、居易のその後を見れば一層明瞭となる。居易は、諷諭詩制作の熱意を無くした後も、閑適詩は、長慶末年、杭州刺史の頃まで作り續けている。そして、太和二年白居易後集五卷を編む時には、長慶集での古體の分類(諷諭詩・閑適詩・感傷詩)を棄て去るに至る。

居易の場合には、元和一五年都に復歸した後も、諫官時代のような政治への情熱は戻らない。そして、詩と佛教が彼の後半生の生きがいとなつていく。彼の詩作の軌跡は、この心境の變化に對應しているのである。

そしてこの心境の變化と詩作の軌跡は、時代の變化と深く關つてゐる。居易はその後半生を、牛李の黨争が激しさを増し、甘露の變を経て宦官の専横がますますひどくなる中唐から晚唐への移行期に生きた。それは官人としての使命感を持って生きることが次第に困難となる時代である。居易はその複雑な時代の中で、自己を全うする道を求

めたのである。

宗元は、その複雑な時代を知らない。彼は詩體を變えたが、官人としての使命感はその變化の後も衰えていない。そのことは詩にも見えていた。柳宗元の詩は、まさに、元和と生死を共にしたのである。

注(1) 版本については、清水茂「日本留下來の兩種柳宗元集版本」(一九八二年、馬平山圖書館金禧紀念論文集。以下、刊行年は下二桁のみ記す)参照。

(2) 『八愚詩』、韓愈に贈った蝦蟇の詩等、宗元の詩の幾らかは失われている。だが、彼の集が大きく損われたという記録は無い。また、生前作品の取捨選擇を行ったという記録も無い。假に幾らかは削られたとしても、その數は少く、この變化は實際の作詩狀況にほぼ等しいものと考えられる。そのことは、以下に述べるこの變化の必然性から逆に確認できる。

(3) 花房英樹「白居易集の批判的研究」(七四、朋友書店)所收の繫年表及び綜合作品表に基づく。

(4) 花房英樹「元稹研究」(七七、桑文堂書店)所收作品綜合表に基づく。
(5) 花房英樹「韓愈歌詩索引」(六四、京都府立大學人文學會)所收資料表に基づく。元和八年にも律絶が古體を上回るが、それは五絶が多量に作られたからである。

(6) 花房英樹「白居易研究」(七一、世界思想社)二〇一頁。

(7) 前掲書二八七頁を参照。

(8) 前掲書二四頁。

(9) 『種桑』は經營のための種樹の詩で、永州の作とは關係が無い。吳肇父が指摘するように(謝康樂詩注卷二引)、柳州の種樹詩に繋がる。

(10) 『新植海石榴』の「糞壤」は離塵に、『紅蕉』の「正陽」は遠遊に、「威感」は悲回風に、「遺芳」は遠遊・哀時命に見える。

(11) 九歌大司命、山鬼等。『古詩十九首』其六・其九。

(12) 杜甫に、句数は不定だが贊公の徳と寺院を歌う五古『大雲寺贊公房四首』(二一六)が有る。宗元はこれをヒントにして、一院の各所を連作形式で詠んだのかも知れない。

(13) 『劄丘覺古贈盧居士藏用七首』(樂生)『(八三)』。

(14) 梁元帝『晚棲鳥』、隋虞世基『晚飛鳥』等。

(15) 齊藤功『馬夜啼』變遷考(一八三、學林)参照。

(16) 拙稿『柳宗元永州望郷詩』(八一、野草二七)で内容に觸れた。

(17) 新式七古については王力『漢語詩律學』第二六節を参照。

(18) 『再溪』の内容の變化は前稿で述べた。

(19) 施子儉『柳宗元年譜』(五八、湖北人民出版社)は長安時代に編年する。

(20) 『寄韋珩』の末尾に俗念を去って自然界と一つになろうとの思いを述べる。また道門に酬いた二首の五古が有る。

(21) この一段は清水茂氏の御教示に基く。

(22) ただし、五排の贈答詩は、長篇が可能なことによって、心の振幅を表現する高い能力を持つ。だから、永州時代には長篇の五排の贈答詩が有った。しかし一方で、五排は特に儀禮度の高い詩體で、儒家的姿勢を崩すことが難しい。儒と釋老とを往復する永州時代の複雑な心境は、五排も擔いきれないのである。

(23) 『答問』(卷一五)に「心に古書を信じて以爲えらく凡そ事皆易し」と有る。

(24) 流謫の原因に對する見方が變つたのだから、長安時代の政治活動も含むかも知れない。

(25) だから、宗元は信念自體を誤りとしてしているのではない。前稿(二四〇頁及び注(17))ではこの面のみを見て、彼の意識の變化の重大さに氣付いていなかった。記して訂正する。

(26) 永州時代、宗元は「大都文は行を以て本と爲す」(卷三四『報袁君陳

秀才避師名書』)と言っている。永州に比べれば、柳州の境遇はこの理念に近い。

(27) 『與蕭翰林儉書』(卷三〇)末尾に「庶わくは(中略)聖唐大雅の什を増さんことを」と有る。

(28) 蹇長春「試論白居易對永貞革新的態度及新樂府運動的歷史背景」(七九、甘肅師大學報三哲學社會科學版)は、新樂府運動の歷史的背景として、元和初期の言論の自由な開明的な氛圍氣を擧げている。その時期が終つたのである。

(29) 元和一〇年春には、八司馬の生存者と共に、元稹も唐州から召還されていた。しかし、彼らは皆、新しい任地に追放される。

(30) 太田次男「白樂天」(八三、集英社)参照。

附記：本稿の成るにあたっては、岡村繁博士から懇切な御指導を賜わった。謹んで感謝の意を表する。

表3 古今詩制作狀況一覽

	五 古			七 古		五排	五律	七律	五絶	七絶	六絶				
長	81					145									
永	山水詩	70・71・72・73・74・75		樂府・歌行の系統の作	125	①	120	㊸	88	27					
		76・77・80・83・86・87			126							②	147	95	65
		91・92・98			127							③			97
	花木詩	102・103・104・105・106	129		④				108						
		107・109・110・111・112	130		⑤				128						
		113・114	131												
	佛教詩	7・⑧・⑨・115・116・117			133		89								
	田園詩	118・119			136										
郊居歲暮他	85・122・123・124														
詠史他	90・137・138														
その他	⑥・⑩・79・82		その他	99											
	93・94・100・144・146			101											
北	11					22			19・20	30					
					24				21・23・26						
					25				29・36						
南	18・31					32・44	34・35	33							
							37・38								
柳	④7・④8	12・⑬	⑭	④3・④6 49・⑤4		⑮・16 39・40 ④2・45 53・63	41		⑮7・50・⑮1・⑮2 ⑮5・⑮6・⑮7・⑮8 ⑮9・⑮0・⑮1・⑮2 ⑮4・⑮6・⑮7・⑮9						
?	78・84	132・134・135							⑮8・96						

※作品番號を○で圍んだものは贈答詩である。

※永州時代の五古・七古の「その他」は、本論第3章第3節に述べる「4. その他」とは關係が無い。

144	掩役夫張進骸	五古	30	永	永	永	
145	省試觀慶雲圖詩	五排	12	貞元6	貞元6	貞元6	永長
146	春懷故園 外集補遺	五古	4	永	永		永
147	送元嵩師詩	五律					永

表2の注を見よ
元和7年前後の作

※丁氏が91・96・104・105を柳州での作とするのは、「柳州縣志」巻10に収載するからである。因みに「柳州縣志」には、5・13・16・17・32・39・40・41・44・45・49・50・51・52・60・63・66・67・69・91・96・104・105・113の24首が詩體別に収載されている。しかし、第一に、ここには5・32という明らかに柳州時代の作ではないものが含まれており、逆に例えば53～59のように明らかに柳州での作であるものが含まれていない。96の詩題が『柳州署中作』となっていることについては一考を要するが、全體として編年の資料にできるものではない。第二に、丁氏は5・32については「柳州縣志」に觸れずに編年し、91・104については「柳州縣志」に載せるから柳州での作だろうとする。その態度は一貫せず據るに足りない。

表2 各時代の各詩體の制作數

作詩時期	詩體		近體						計
	五古	七古	五排	五律	七律	五絶	七絶	六絶	
長	1	0	1	0	0	0	0	0	2
永	56	10	6	2	2	2	5	0	83
北	1	0	0	3	0	0	7	1	12
南	2	0	0	0	2	4	1	0	9
柳	2	2	1	4	8	1	16	0	34
?	2	3	0	0	0	0	2	0	7
計	64	15	8	9	12	7	31	1	147

※七絶には拗體・古體を含め、五絶の古體(98・146)は五古として、表が煩雜になるのを避けた。

※六言絶句は、「詩轍」巻2に説く六言律の法に適っている。

97	雨晴至江渡	七絶		5	6	永	古體
98	江雪	五古	4	山	?	永	表2の注を見よ
99	冉溪	七古	8		5	永	
100	法華寺西亭夜飲	五古	6		4	4	永
101	戲題石門長老東軒	七古	8		4	5	永 後半入律
102	亦簷下始栽竹	五古	30	花	永	6	永 永
103	種仙靈毗	五古	34	花	永	4	永 永
104	種朮	五古	24	花	永	柳	永 永 詩中の東山は70の東峰と同じと見る
105	種白囊荷	五古	22	花	永	柳	永 (永)
106	新植海石榴	五古	8	花	永	?	永 (永)
107	戲題堦前芍藥	五古	10	花	永	?	永 (永)
108	始見白髮題所植海石榴樹	七絶			永	?	永 永
109	植靈壽木	五古	16	花	永	4	永 永
110	自衡陽移桂十餘本植零陵所住精舍	五古	18	花	永	3	永 永
111	湘岸移木芙蓉植龍興精舍	五古	8	花	永	3	永 永
112	早梅	五古	8	花	永	永	永 永
113	南中榮橘柚	五古	8	花	永	永	永 永
114	紅蕉	五古	8	花	永	?	(永)
115	巽公院五詠之一 淨土堂	五古	10	佛	6?	3	1·2 永
116	巽公院五詠之二 曲講堂	五古	10	佛	6?	3	1·2 永
117	巽公院五詠之三 禪堂	五古	10	佛	6?	3	1·2 永
118	巽公院五詠之四 芙蓉亭	五古	10	佛	6?	3	1·2 永
119	巽公院五詠之五 苦竹橋	五古	10	佛	6?	3	1·2 永
120	梅雨	五律			永	永	永 永
121	零陵早春	五絶			永	永	永 永
122	田家三首之一	五古	12	田	永	永	永 永
123	田家三首之二	五古	18	田	永	永	永 永
124	田家三首之三	五古	14	田	永	永	永 永
125	行路難三首之一	七古	12		永	永貞1	永 永 樂府詩集卷71
126	行路難三首之二	七古	14		永	永貞1	永 永 同上
127	行路難三首之三	七古	14		永	永貞1	永 永 同上
128	聞籍田有感	七絶			5	5	6 永 永
129	跋烏詞	七古	16		永	永貞1	永 永
130	籠鷹詞	七古	14		永	永貞1	永 永
131	放鷓鴣詞	七古	14		永	9	永 永
132	龜背戲	七古	20		永	永貞1	? 長安時代かも知れない
133	聞黃鸝	七古	18		永	永	永 ?
134	渾鴻臚宅聞歌效白紵	七古	7		永	?	? 樂府詩集卷55
135	楊白花	七古	6		永	永貞1	? 樂府詩集卷73
136	漁翁	七古	6		永	永	永 永
137	飲酒	五古	16		永	7	永 永
138	讀書	五古	28		永	4	永 永
139	感遇二首之一	五古	20		永	永貞1	永 永
140	感遇二首之二	五古	8		永	永貞1	永 永
141	詠史	五古	16		永	永貞1	永 永
142	詠三良	五古	18		永	永貞1	永 永
143	詠荆軻	五古	32		永	10	永 永

55	殷賢戲批書後寄劉連州并示孟崑二童	七絶	○	10	10	10	柳
56	重贈二首之一	七絶	○	10	10	10	柳
57	重贈二首之二	七絶	○	10	10	10	柳
58	疊前	七絶	○	10	10	10	柳
59	疊後	七絶	○	10	10	10	柳
60	銅魚使赴都寄親友	七絶	○	柳	10		柳
61	韓漳州書報徹上人亡因寄二絶之一	七絶	○	11	11	11	柳
62	韓漳州書報徹上人亡因寄二絶之二	七絶	○	11	11	11	柳
63	柳州城西北隅種甘樹	七律		柳	13	柳	柳
64	聞徹上人亡寄侍郎楊丈	七絶	○	11	11	11	柳
65	段九秀才處見亡友呂衡州書迹	七絶		9	7	9	永
66	柳州寄京中親故	七絶	○	柳	13	柳	柳
67	種木槲花	七絶		柳	柳	柳	柳
68	摘櫻桃贈元居士時在望仙亭南樓與朱道士同處	七絶	○	柳	柳	?	?
69	酬曹侍御過象縣見寄 卷四十三	七絶	○	柳	14		柳
70	法華寺石門精室三十韻	五古	60	山	4	5	永
71	遊朝陽巖遂登西亭二十韻	五古	40	山	4	4	永
72	湘口館瀟湘二水所會	五古	18	山	永	4	永
73	登蒲州石磯望橫江口潭島深迴斜對香零山	五古	22	山	永	4	永
74	南澗中題	五古	16	山	7	7	永
75	遊石角過小嶺至長島村	五古	28	山	永	4	永
76	與崔策登西山	五古	24	山	7	7	7
77	構法華寺西亭	五古	28	山	4	1	2
78	夏夜苦熱登西樓	五古	14		永	?	?
79	覺衰	五古	22		永	4	永
80	遊南亭夜還敘志七十韻	五古	138	山	3	3	3
81	韋道安	五古	64		貞元16	貞元16	貞元16
82	哭連州凌員外司馬	五古	58		1	3	1
83	旦攜謝山人至愚池	五古	8	山	5	6	永
84	獨覺	五古	6		永	?	?
85	首春逢耕者	五古	18	田	永	永	永
86	溪居	五古	8	山	永	6	永
87	夏初雨後尋愚溪	五古	8	山	永	6	永
88	入黃溪聞猿	五絶			8	8	8
89	韋使君黃溪祈雨見召從行至祠下口號	五排	16		8	8	8
90	郊居歲暮	五古	8		永	?	永
91	秋曉行南谷經荒村	五古	8	山	永	柳	(永)
92	雨後曉行獨至愚溪北池	五古	6	山	5	6	永
93	中夜起望西園值月上	五古	8		永	?	永
94	零陵春望	五古	8		永	永	永
95	從崔中丞過盧少府故居	七律				9	永
96	夏晝偶作	七絶			永	柳	?

狂立名は分體から洩らしている

詩中の東嶺は70の東峰と同じと見る
「古詩聲譜」卷一に依る

古體

17	與浩初上人同看山寄京華親故	七絶	○	柳	11	11	柳	
18	再至界圍巖水簾遂宿巖下	五古	18	南	南	南	南	
19	詔追赴都迴寄零陵親故	七絶	○	北	北	北	北	
20	過衡山見新花開却寄弟	七絶	○	北	北	北	北	
21	汨羅遇風	七絶		北	北	北	北	
22	朗州竇常員外寄劉二十八詩見促行 騎走筆酬贈	五律	○	北	北	北	北	
23	離觴不醉至驛却寄相送諸公	七絶	○	北	北	北	北	
24	北還登漢陽北原題臨川驛	五律		北	北	北	北	
25	善謔驛和劉夢得醉淳于先生	五律	○	北	北	北	北	
26	詔追赴都二月至灞亭上	七絶		北	北	北	北	
27	李西川薦琴石	七絶		8	8		永	
28	同劉二十八哭呂衡州兼寄江陵李元 二侍御	七律	○	6	6	6	永	
29	奉酬楊侍郎丈因送八叔拾遺戲贈詔 追南來諸賓二首之一	七絶	○	北	京	北	北	元和10年都へ歸還 した時の作・北還 最後の作とする
30	奉酬楊侍郎丈因送八叔拾遺戲贈詔 追南來諸賓二首之二(もと『六言』 とする。校勘記に従う)	六絶	○	柳	京	北	北	同上
31	商山臨路有孤松往來斫以爲明好事 者憐之編竹成援遂其生植感而賦詩	五古	8	南	南	南	南	汪立名は五律とす るが仄調だから古 詩とみなす
32	衡陽與夢得分路贈別	七律	○	南	南	南	南	
33	重別夢得	七絶	○	南	南	南	南	
34	三贈劉員外	五絶	○	南	南	南	南	
35	再上湘江	五絶		南	南	南	南	
36	清水驛叢竹天水趙云余手種一十二 莖	七絶		北	北	北	北	
37	長沙驛前南樓感舊	五絶		南	南	南	南	
38	桂州北望秦驛手開竹逕至釣磯留待 徐容州	五絶		南	南	南	南	
39	登柳州城樓寄漳汀封連四州	七律	○	10	10	10	柳	
40	柳州寄丈人周韶州	七律	○	11	11		柳	
41	登柳州峨山	五絶		柳	11		柳	
42	得盧衡州書因以詩寄	七律	○	柳	11		柳	
43	答劉連州邦字	五律	○	南	10	南	柳	
44	嶺南江行	七律		南	南	南	南	赴任の途次柳江あ たりでの作
45	柳州峒氓	七律		柳	12		柳	
46	酬徐二中丞普寧郡內池館即事見寄	五律	○	柳	10	柳	柳	
47	酬賈鵬山人郡內新栽松寓興見贈二 首之一	五古	10	○	柳	10	柳	
48	酬賈鵬山人郡內新栽松寓興見贈二 首之二	五古	10	○	柳	10	柳	
49	種柳戲題	五律		柳	柳	柳	柳	
50	柳州二月榕葉落盡偶題	七絶		柳	11		柳	「詩律兆」卷9に 前正後偏體とする
51	浩初上人見貽絕句欲登仙人山因以 酬之	七絶	○	柳	11		柳	
52	雨中贈仙人山賈山人	七絶	○	柳	10	10	柳	古體
53	別舍弟宗一	七律		11	11	11	柳	
54	奉和周二十二丈酬郴州侍郎衡江夜 泊得韶州書并附當州生黃茶一封率 然成篇代意之作	五律	○	11	11	11	柳	

参考資料

表1 基礎資料

- 1 テキストは1979年中華書局刊「柳宗元集」を用いた。
- 2 詩體の判定は、汪立名輯訂「柳河東詩集」二卷（宣統2年，時中書局）に據り、「唐詩品彙」及び聲律關係の諸書を参考にした。汪氏に従わない場合は備考欄に注記した。
- 3 分類は本稿の目的に必要な範囲にとどめた。「山」は山水詩を、「花」は花木詩を、「佛」は佛教詩を、「田」は田園詩を示す。○印は贈答詩である。
- 4-1 作詩時期は、本稿では制作地が分ればよいのだが、客観度を高めるため、従來の編年の結果を示した上で、私の時期判定を記した。「施」は施子愉「柳宗元年譜」（1958年，湖北人民出版社）、「丁」は丁秀慧「柳河東詩繫年集釋」（1974年，國立臺灣師範大學國文研究所）、「羅」は羅聯添編著「柳宗元事蹟繫年暨資料類編」（1981年，國立編譯館中華叢書編審委員會）である。
- 4-2 「長」は長安時代を、「永」は永州時代を、「北」は北還時（元和10年1・2月）を、「南」は柳州への再度の南遷時（元和10年3月～6月）を、「柳」は柳州時代を指す。單に數字を示したのは元和の何年かを示す。「10」とあるのは、元和10年の柳州での作である。作品番號29・30の丁氏の欄に「京」とあるのは、召選されて都に在る時の作の意である。
- 4-3 「？」は不明を示し、數字に「？」を付したものは疑いを存する編年を示す、空白は編年から洩れていることを示す。時期判定に（ ）を付したものは、内容による推定度の高いものである。
- 4-4 91・96・104・105の時期判定については欄外の注記を見られたい。

作品番號	詩題	詩體	句數	分類	作詩時期				備考
					施	丁	羅	時期	
	卷四十二								
1	同劉二十八院長述舊言懷感時書事奉寄禮州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八十通贈二君子	五排	160	○	永	貞元21		永	
2	弘農公以碩德偉材屈於誣枉左官三歲復爲大僚天監昭明人心感悅宗元竄伏湘浦拜賀末由謹獻詩五十韻以畢微志	五排	100	○		7	7	永	
3	酬韶州裴曹長使君寄道州呂八大使因以見示二十韻一首并序	五排	40	○	4	4		永	
4	酬婁秀才將之淮南見贈之什	五排	24	○	永	3	4	永	
5	酬婁秀才寓居開元寺早秋月夜病中見寄	五排	12	○	永	3	4	永	
6	初秋夜坐贈吳武陵	五古	16	○	永	4		永	
7	晨詣超師院讀禪經	五古	14	佛	永	2		永	
8	贈江華長老	五古	12	○佛	永	2		永	
9	巽上人以竹間自採新茶見贈酬之以詩	五古	16	○佛	6?	2	1・2	永	
10	零陵贈李卿元侍御簡吳武陵	五古	16	○	永	4		永	
11	界園巖水簾	五古	20		北	北	北	北	
12	古東門行	七古	18		10	10	10	柳	樂府詩集卷37
13	寄韋珩	七古	30	○	柳	12	12	柳	
14	奉和楊尚書郴州追和故李中書夏日登北樓十韻之作依本詩韻次用	五排	20	○	11	11	11	柳	
15	楊尚書寄郴筆知是小生本樣令更商榷使盡其功亂獻長句	七律		○	11	11	11	柳	
16	南省轉牒欲具江國圖令盡通風俗故事	七律			柳	柳		柳	